

★ コース上の寺院・神社へおまいりされない方は、境内に入らず前をお通りください ★

スペシャルコース (約 14 km)

1 伏見港公園 → 2 三栖神社 → 3 恋塚寺 → 4 鳥羽離宮跡公園・鳥羽伏見戦跡碑 → 5 城南宮 → 6 白河天皇成菩提院陵 → 7 北向山不動院 → 8 鳥羽天皇安楽寿院陵 → 9 安楽寿院 → 10 近衛天皇安楽寿院南陵 → 11 藤森神社 → 12 墨染寺 → 13 欣浄寺 → 14 大石良雄遊興の地よろづや跡 → 15 撞木町遊郭跡 → 16 松林院墓地 (寺田屋お登勢墓) → 17 大黒寺 (薩摩藩九烈士の墓) → 18 金札宮 → 19 大光寺 → 20 本教寺 → 21 源空寺 → 22 東本願寺伏見別院・会津藩駐屯地跡 → 23 西岸寺 → 24 寺田屋 → 25 月桂冠大倉記念館 → 26 長建寺 → 1 伏見港公園

ファミリーコース (約 10 km)

1 伏見港公園 → 2 三栖神社 → 3 恋塚寺 → 鳥羽離宮跡公園・鳥羽伏見戦跡碑 → 5 城南宮 → 6 白河天皇成菩提院陵 → 7 北向山不動院 → 8 鳥羽天皇安楽寿院陵 → 9 安楽寿院 → 10 近衛天皇安楽寿院南陵 → 11 寺田屋 → 12 伏見港公園

1. 伏見港公園



伏見港は豊臣秀吉の伏見城築城の際に作られ、大坂と京都の水運の拠点となった。江戸時代になると、大坂と伏見を結ぶ三十石舟や京都と伏見を結ぶ高瀬舟が就航し、沿岸には多くの問屋が建ち並び、伏見は港町として栄えた。明治維新後も外輪船が航行して、活況が続いたが、陸上交通の近代化により、次第に水運が衰退し、昭和30年代半ばには港としての機能は幕を閉じた。その跡を埋め立てた伏見港公園には、そうした歴史を偲び、復元した三十石舟が置かれている。

4. 鳥羽離宮跡公園・鳥羽伏見戦跡碑

鳥羽離宮は応徳3年(1086)白河上皇によって造営が開始され、北殿・南殿・泉殿・馬場殿などが相次いで完成。東西1.5km、南北1kmに及び、「都遷りがごとし」といわれるほど、壮大な規模を誇った。続く鳥羽上皇の時代には、さらに東殿・田中殿も完成、院政時代の政治・文化の中心として栄華をきわめた。幕末には、大政奉還後、大坂城にいた徳川慶喜が上洛を決意し、慶応4年(1868)正月3日、幕府軍は鳥羽街道と伏見街道に分かれて進軍。この地に布陣した薩摩軍の砲兵隊との間で激戦が繰り広げられた。鳥羽離宮公園内には、翌年夏まで続いた戊辰戦争の発端となった鳥羽伏見戦の古戦場であることを示す記念碑が建てられている。

7. 北向山不動院



大治5年(1130)、鳥羽上皇が難治の重病になり、鳥羽離宮内で覚鏡(かくばん)上人(興教大師)が加持祈禱を行うと、満願の日に鳥羽上皇の夢枕に不動明王が現れた。その姿は右足の結跏趺坐(けつかふざ)を解き、半跏趺坐(はんかふざ)となり、立ちあがってお救いくださいというお姿であった。その不動明王の姿を拝し伏せられた鳥羽上皇は、覚鏡上人に勸められ、離宮内に御堂を建て、先の半跏の不動明王像を造り、都の守護のため、北向きに祀った。これが北向山不動院の起りとなり伝えられる。現在の本堂は、正徳2年(1712)霊元天皇によって、東山天皇の御殿が下賜され、移築したもの。近畿三十六不動尊第22番札所。

11. 藤森神社



神功皇后が新羅出征の際に用いた軍旗を立て、兵器を納めて塚を築き、神を祀ったのが始まりと伝え、本殿東に「旗塚」がある。桓武天皇も、平安京遷都に際し、弓兵政所(ゆづみまんどころ)としたと伝えられる。毎年5月5日に行なわれる「藤森祭」は、「深草祭」ともいわれ、清和天皇の貞観年間(859～877)の創始と伝えられる。朝から三基の神輿が氏子地域を巡幸し、甲冑姿に身を固めた武者行列が練り歩く。5月5日の端午の節句に武者人形を飾る風習は、この「藤森祭」に由来するといわれ、藤森神社は「菖蒲の節句発祥の地」とされる。現在の本殿は正徳2年(1712)、中御門天皇より宮中内侍所(ないしどころ)を賜ったもの。また本殿背後の八幡宮、大將軍社の社殿はいずれも永享10年(1438)に室町幕府第6代将軍足利義満によって造営で、重要文化財の指定を受ける。

15. 撞木町遊郭跡

この地は、かつて京街道、大津街道の分岐点に近かったことから栄え、芝居小屋、土産物屋、下級遊郭が軒を並べていた。傾城町(けいせいまち)としての歴史は慶長元年(1596)、伏見城にいた豊臣秀吉が林又一部に免許を与えたことに始まる。関ヶ原合戦の際の伏見落城で衰微したが、慶長9年(1604)に渡辺掃部・前原八右衛門の両人が復興し、伏見の発展と共に、延宝年間(1673～81)から元禄年間(1688～1704)にかけて最盛期を迎えた。「撞木町」の名称は、街の形がT字形をしていて、鉦(かね)を敲(たた)く「撞木」に似ていることから通称された。

18. 金札宮



金札宮は、伏見九郷では御香宮と並ぶ古社で、旧久米村の産土神(うぶすながみ)。祭神は天玉命(あめのたまのみこと)(白菊大明神)・天照大神(あまてらすおほみかみ)・倉稲魂命(くらいねのみこと)。伏見(高天原から見た日本)のことで宮居を建設していること、突如、金の札が降り、札には「永く伏見に住んで国土を守らん」と記されていた。何事かと人々が集まって来ると、虚空から、「我こそは天照大神から遣わされた天玉命である。我を拝まんとするなら、なお瑞垣(みずがき)を造るべし」と告げた、と伝えられる。伏見の久米の里に一人の翁が住んでいて、白菊に水をやり育てていたが、ある年、旱天(かんてん)が続き、稲が枯れかかったが、翁が白菊の露を注ぐと、そこから水が湧き出した、とも伝えられる。「白菊井」は、旧社地の御駕籠(みりや)にあり、近年まで名水が湧いていたが、現在は涸れてしまい、近くの板橋小学校内に近年新たに井戸が掘られ、「板橋白菊井」と名付けられた。また、現在は御香宮境内に祀られる「白菊石」も、室町時代の「伏見九郷之図」では、金札宮の本殿背後に描かれている。

21. 源空寺



天台宗寺門派の忍空上人によって開かれた寺で、建久6年(1195)、再建された東大寺大仏殿の落慶法要の導師を務めた浄土宗の宗祖法然上人が帰りに立ち寄り、と伝えられる。すると、たちまち多くの人々が押し寄せ、法然上人との別れを惜しみ、「ぜひ、上人様のお姿を」と懇願すると、法然上人は自作の像を授けた、という。これが源空寺伝来の「張貫(はりぬき)の尊像」だとされる。重厚な二階門は伏見城築城の際に移築されたと伝えられ、両脇に祀られる朝日大黒天像、即一六鉢地藏尊、愛染明王像は伏見城築城から移されたといわれ、朝日大黒天像は豊臣秀吉の念持仏であったと伝えられる。法然上人(円光大師)二十五霊場の第15番札所。

24. 寺田屋



寺田屋は伏見の船宿で、幕末の文久2年(1862)4月23日にはいわゆる「寺田屋事件」の舞台となり、公武合体を推し進める関白九条尚忠や京都所司代酒井忠義らの殺害を企てていた急進派の薩摩藩士有馬新七ら9名が島津久光の命によって粛清された。また、慶応2年(1866)正月23日には、薩摩藩士を襲って寺田屋に宿泊していた坂本龍馬を伏見奉行所の捕吏たちが困りだが、お龍が急を告げたため、難を逃れた。慶応4年(1868)の「鳥羽伏見の戦い」で焼失。現在の建物はその後再建されたもの。見学可能 料金大人600円、中高大学生300円。

2. 三栖神社



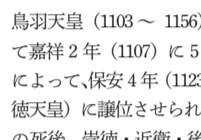
創建は不詳だが、旧下三栖村の産土神として古くからこの地で信仰を集め、天武天皇、伊邪那岐(いざなぎ)大神、応神天皇を祀る。現在の社殿、拝殿は慶長8年(1603)旧幕臣の角倉了以、加藤清正の家臣横地助之丞、三栖の郷士藤林時次らが協力して造営したものである。例祭の「炬火(たいまつ)祭」は、宇治川に自生する葎で作られた大小の炬火を昇(か)ぎまわる神事で、京都市の登録無形民俗文化財。壬申の乱の際に、大友皇子の近江朝廷との決戦に向かう大海人皇子(のちの天武天皇)が当地を通り、住民たちが篝火(かがりび)を灯して暗夜を照らしたことに因むという。

5. 城南宮



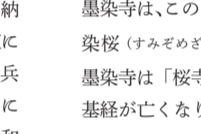
延暦13年(794)の平安京遷都に際し、国常立尊(くにのとこたちのみこと)と八千矛神(やちほこのかみ)と神功皇后(じんぐこうごう)を祀り、以来都の南方に鎮座して国を守護する神社として崇敬されてきた。院政期の熊野詣の際には、上皇たちの方除(ほうよけ)の精進所(しょうじんじどころ)となり、旅の安全が祈願された。境内に広がるおよそ1万坪の神苑「薬水苑(やくすいゑん)」には「源氏物語」に登場する80種類もの草花が植えられ、四季折々の風情を楽しむことができる。毎年春と秋には、平安の王朝時代を偲ぶる雅な「曲水の宴」が行われることでも有名である。

8. 鳥羽天皇安楽寿院陵



鳥羽天皇(1103～1156)は、父堀河天皇の病死をうけて嘉祥2年(1107)に5歳で即位したが、祖父白河上皇によって、保安4年(1123)皇太子顕仁(あきひと)親王(崇徳天皇)に譲位させられた。大治4年(1129)白河上皇の死後、崇徳・近衛・後白河の三代、28年間にわたって院政を行なった。保延5年(1139)鳥羽上皇は自らの葬堂とするため本御塔(ほんみとら) (三重塔)を建立。保元元年(1156)7月2日に亡くなると、遺言に従い、火葬はされず、塔内に葬られた。現在の安楽寿院陵の建物は江戸時代に建てられた法華堂。

12. 墨染寺

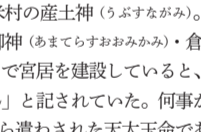


墨染寺は、このあたりの地名「墨染(すみぞめ)」の由来となった「墨染桜(すみぞめざくら)」で名高い。現在の「墨染桜」は四代目、墨染寺は「桜寺」と通称される。寛平3年(891)太政大臣藤原基経が亡くなり、この地に葬られたのを哀悼し、上野岑雄(かみつけのみねお)朝臣が「深草の野辺の桜し 心有らば 今年ばかりは 墨染に咲け」(『古今和歌集』)と詠んだところ、心なき桜もこれに感応して色あせて咲いたとの逸話で知られる。豊臣秀吉は細川幽斎からこの話を聞き、その旧蹟貞観寺の再興を思い立ち、日蓮宗の日秀上人に土地を与え、復興されたのが現在の墨染寺で、寺宝に長谷川等伯が描いたとされる豊臣秀吉の肖像画が伝わる。

16. 松林院墓地(寺田屋お登勢墓)

かつては宗玄寺という寺で、現在は松林院の墓地になっている。お登勢は、幕末期の伏見の船宿「寺田屋」の女将。寺田屋は薩摩藩の定宿で、お登勢は勤王の志士たちを庇護していた。文久2年(1862)4月23日の「寺田屋事件」で犠牲となった薩摩藩士有馬新七ら9名の法要を営み、慶応2年(1866)正月23日の坂本龍馬襲撃事件のあと、龍馬(りゅうま)の愛人お龍を養女として預かった。お登勢は明治10年(1877)9月7日に40歳で亡くなった。墓には「喜道院妙持信女」の法号が刻まれる。

19. 大光寺



文応元年(1260)、寛海上人が開いた浄土宗の寺。頓誉上人の代に、当時伏見奉行の任にあった小堀遠州(政一)から青山伯耆守忠俊の屋敷跡を拝領し、寛永元年(1624)、現在の寺に移転した。山門脇にある薬師堂は、明治2年(1869)6月、華頂宮(かちょうのみや)家の旧御殿を拝領したもので、桃山様式の豪華な建築。薬師堂本尊の薬師三尊像は、大和国の三笠山薬師寺から移された平安時代の仏像で、「お手掬(てつぎ)薬師」と呼ばれ、篤く信仰されてきた。

22. 東本願寺伏見別院・会津藩駐屯地跡



伏見御堂は慶長年間(1596～1615)に東本願寺の初代法主・教如上人が創建した。本堂は、徳川家康の居城・向島城の陥落の遺構を移築したものと伝えられる。幕末の慶応4年(1868)11月2日、鳥羽伏見の戦いが始まる前日夕刻、会津藩の先鋒隊約200名が伏見京橋に上陸、ここ伏見御堂を宿陣とした。翌3日、薩摩藩兵との間で激戦が展開され、建物は大きな損害を受けた。そのため、当初は東向きに建てられていたが、明治18年(1885)規模を縮小して南向きに建て替えられた。平成2年(1990)老朽化のため取り壊されたが、平成26年(2014)4月11日、新本堂が竣工し、翌12日に落慶法要と教如上人400回忌法要が営まれた。

25. 月桂冠大倉記念館



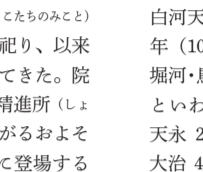
伏見は、自然豊かな桃山丘陵の奥深くを流れる良質な地下水によって伝統的に酒造業が盛んであった。月桂冠は、寛永14年(1637)の創業以来、およそ400年にわたって、伏見で酒造業を続けている。月桂冠創業の地に建つ「大倉記念館」は、明治42年(1909)建造の酒蔵を活用したもので、月桂冠創業以来の歴史や日本酒の伝統的な製造工程、京都市有形民俗文化財の指定を受ける酒造用具類などを見学することができる。

3. 恋塚寺



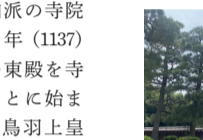
平安時代末期、美女として知られた袈裟御前(けさごぜん)の菩提寺として、「荒法師」文覚上人が建てたと伝えられる。浄土宗。袈裟御前は源渡(みなもとのわたる)の妻であったが、従兄弟の遠藤盛遠(もりとお)の(のちの文覚)に横恋慕された。夫の命を守るために身代わりとなって盛遠に殺され、「貞女の鑑」とされた。盛遠は己の非道を深く恥じ、出家して「文覚」と称し、袈裟御前の菩提を弔ったと伝えられる。境内に袈裟御前の墓と伝えられる「恋塚」があり、本堂内には袈裟御前・源渡・文覚の木像が安置される。

6. 白河天皇成菩提院陵



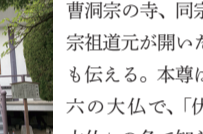
白河天皇(1053～1129)は、延久4年(1072)に即位し、応徳3年(1086)に退位するが、譲位後、院政を開始し、摂関家を抑えて、堀河・鳥羽・崇徳3代、43年間に渡り、政治の実権を握り、「治天の君」といわれた。天仁元年(1108)、寿康として三重塔建立を計画し、天永2年(1111)に落成。没後はここに納骨することを遺詔した。大治4年(1129)7月7日、西三条殿内裏で亡くなり、15日に茶毘に付され、天承元年(1131)7月9日、三重塔に納骨された。建長元年(1249)三重塔が焼失。以後、再建されることはなかった。

10. 近衛天皇安楽寿院南陵



近衛天皇(1139～1155)は鳥羽天皇の第9皇子で、康治元年(1142)3歳で即位した。久寿2年(1155)没。皇子はなく、鳥羽天皇第4皇子で、兄の雅仁親王が即位した(後白河天皇)。近衛天皇の遺体は船岡山の山作所で火葬され、遺骨は知足院本堂に安置され、長寛元年(1163)11月28日、安楽寿院新御塔(しんみとら) (多宝塔)に遷された。多宝塔は文禄5年(1596)閏7月12日のいわゆる「慶長大地震」で倒壊したが、慶長11年(1606)豊臣秀頼によって再興された。片桐且元が奉行を務めた。

13. 欣浄寺



曹洞宗の寺、同宗の宗祖道元が開いたとも伝える。本尊は丈六の大仏で、「伏見大仏」の名で知られる。寺地は、小野町のもとへの「百夜(ももよ)通い」の伝説で有名な深草少将の邸宅跡といわれ、境内に少将塚、小野塚、深草少将姿見の井戸(涙の水)などがある。江戸時代には浄土宗であったが、文化年間(1804～18)に曹洞宗へ改宗した。

17. 大黒寺(薩摩藩九烈士の墓)

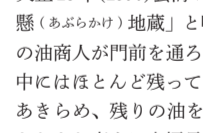
大黒寺は、平城天皇第3皇子で、空海の弟子となった真如法親王の開基と伝える古刹。最初は「長福寺」といったが、元和元年(1615)薩摩藩主島津家久が伏見奉行の山口駿河守直友に懇請して、この寺を薩摩藩の祈禱所として認めてもらい、本尊の出世大黒天に因んで、寺号を「大黒寺」に改めた。境内には、徳川幕府から押し付けられた難工事の木曾・掛斐・長良三川治水工事を完成させながらも、藩に財政負担をかけたことを詫言、宝暦5年(1755)5月25日に切腹を遂げた薩摩藩家老・平田朝貞の墓、天明5年(1785)7月26日、悪政を敷く伏見奉行小堀政方(まさみち)に対して決起し、江戸に直訴に及んだ文珠九助ら「伏見義民」7人の遺髪塔、文久2年(1862)4月23日の「寺田屋事件」で犠牲となった有馬新七ら薩摩藩士9名(薩摩九烈士)の墓などがある。

20. 本教寺



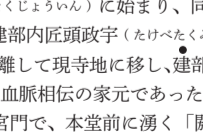
文禄3年(1594)、日親門流の日受上人によって創建された日蓮宗の寺。はじめ西浜町に建てられたが、徳川家康の次女督姫(とくひめ)(良正院)が深く篤依し、池田輝政に再嫁したのち、その館を寄進して、現在の備後町(大手筋)に移った。今の本堂は、享保14年(1729)に関白近衛家久の堀川御殿を移築したもので、伏見城から移したと伝える豊臣秀吉遺愛の牡丹があり、「慶長牡丹の寺」と呼ばれる。また、妙見堂の本尊は妙見大菩薩像は、伏見城下の池田輝政上屋敷に祀られていたもので、本教寺は「大手筋の妙見さん」とも呼ばれ、洛陽十二支妙見巡りの午霊場となっている。

23. 西岸寺



天正18年(1590)雲海(うんかい)上人によって創建された浄土宗の寺。地藏堂には、「油懸(あぶらかけ)地藏」と呼ばれる石仏の地藏尊を安置している。むかし山崎(乙訓郡)の油商人が門前を通ろうとしたとき、転んでしまい、油をこぼしてしまった。桶の中にはほとんど残っていなかったため、果敢として立ちつくしたが、これも運命とあきらめ、残りの油を地藏尊にかけて帰った。すると、以来、商売が大繁盛して、たちまち商人は大福長者になったという。それ以降、この地藏尊に油をかけて一心に祈願すれば必ず霊験があるといわれ、人々から篤く信仰されるようになった。境内には、貞享2年(1685)に芭蕉が当寺住職任口(にんぐち)上人を訪ねた際に詠んだ「我が衣(わがぎぬ)に ふしみの桃の しずくせよ」の句碑もある。文化2年(1805)に建てられたもの。

26. 長建寺



弁財天を本尊とし、「鳥の弁天さん」の別名で親しまれる真言宗醍醐派の寺。寺の歴史は、平安時代中期、橘俊綱の山荘を寺にした即成院(そくじょういん)に始まり、同院は豊臣秀吉の伏見築城に際し深草大亀谷に移された。元禄12年(1699)、伏見奉行の建部内匠頭政字(たけべたくみのかみまさのき)が、中書島を開拓する際に大亀谷から即成院の本尊(たつちゅう)・多聞院を分離して現寺地に移し、建部内匠頭の長命息災を祈る意味で、寺号を「長建寺」と改めた。塔頭の八臂弁財天像は、琵琶血脈相伝の家元であった伏見宮家の持仏堂に祀られていたものと伝えられる。山門は、独特の中国風の形をした竜宮門で、本堂前に湧く「関伽水(あがすい)」は伏見の名水として知られる。

大会途中で棄権したり、救護を要する時は…

大会本部 (Central Site) TEL 080-8506-5200 この電話は大会 当日のみ有効です

救護 (First Aid)